

佐井寺東地区土地区画整理事業にともなう

埋蔵文化財試掘調査概要報告書

—加賀領高岩宿跡・佐井寺尾根古墳—

昭和34年3月

吹田市教育委員会

吹田市都市開発部区画整理課

序

吹田市佐井寺は、千里丘陵の縁に閉まれた清閑な村でした。村の中心には、延喜式内社伊射奈岐神社をいただき、古い歴史をもつ聚落なのです。しかし、戦後ニュータウンの造成をはじめとして、周辺の情況が刻々と変貌してゆき、本地域の開発も必至となってくるなかで、地元の皆様の協力を得て、都市開発部によって区画整理事業が着手されました。

しかし、この中に、2箇所の埋蔵文化財包蔵地があることがわかり、市教育委員会では、計画段階で早急な実体の把握のため、試掘調査を実施しました。

本書はその成果をまとめたのですが、この成果をもとに、区画整理課とさらに仔細な協議をすすめてゆく所存であります。

昭和54年3月

吹田市教育委員会

教育長 中 村 勇 一

例　　言

1. 本書は、吹田市土地区画整理事業の一環として実施される佐井寺東地区土地区画整理事業地内に所在する34号須恵器窯跡と佐井寺掘抜水路に対する試掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査費は区画整理事業費によったが、現地調査から本書の編集に至るまでは吹田市教育委員会が担当した。
3. 本書の執筆は市教育委員会藤原　学が行ない、大阪府文化財愛護推進委員鍋島敏也、関西大学学生福本　明がこれを補助した。外業、内業調査においては、関西大学考古学研究室の協力を得た。
4. 現地調査においては、在地の奥保華、奥弓右衛門両氏から多くの援助をいただいたほか、大阪府文化財愛護推進委員吹田市協議会の各位からも貴重な助言をいただいた。明記して謝意を表したい。

目　　次

第1章　試掘調査に至るまで.....	1
第2章　試掘調査の経過.....	3
第3章　34号須恵器窯跡の試掘調査.....	4
第4章　佐井寺掘抜水路の試掘調査.....	11
第5章　今後の問題.....	14



第1図 34号須恵器窯跡付近の現状

第1章 試掘調査に至るまで

吹田市大字佐井寺は、千里丘陵の谷間にひっそりと軒を並べた小集落であった。地理的には、隣接する山田とともに、丘陵谷間の湧水点を中心に発展した自然発生集落とされるが、村の中心に、式内社伊射奈岐神社をいただき、さらに、行基菩薩創建の伝承をもつ佐井寺(一時山田寺と号す)があり、村の発生は比較的古いようである。

さらに、近代に至って、佐井寺焼の興ったところでもあり、周囲の自然環境を含めて、地理・歴史的にも市内ではユニークな存在でもある。

昭和37年人居の開始された千里ニュータウンによって、集落の北方一帯は大きく開発されてゆく中で、本集落は交通の上からもやや不便な面もあって、比較的旧来の趣がのこされていた。

しかし最近に至って、西方の千里山方面から、東方の山田方面から、さらに南からは竹谷団地などと、周囲から開発の波がおしよせる中で、本地域の開発ももはや時間の問題となってきたのである。

吹田市では、無秩序な乱開発から生活環境を守るために、都市計画のととのった町づくりをはじめ、昭和36年から、土地区画整理事業に着手し、吹田南地区第一土地区画整理事業・同第二土地区画整理事業、さらには、江坂地区土地区画整理事業を完成させ、成果をあげてきた。

しかし、吹田南第二土地区画整理事業では、区画整理工事中に発見された垂水南遺跡の調査に充分な配慮が行われなかつたため、最近に至って、ビル建設工事中、埋蔵文化財が発見されるような事態がおこるなど、従来の土地区画整理事業の進行にあたって、埋蔵文化財の保護に必ずしも周到な対策がとられたとはいえないような状態であった。

いうまでもなく、土地区画整理事業のような、大規模な開発行為の際には計画段階において、可能な限り早期に、遺跡の実態を把握し、対策を講じなければならない。

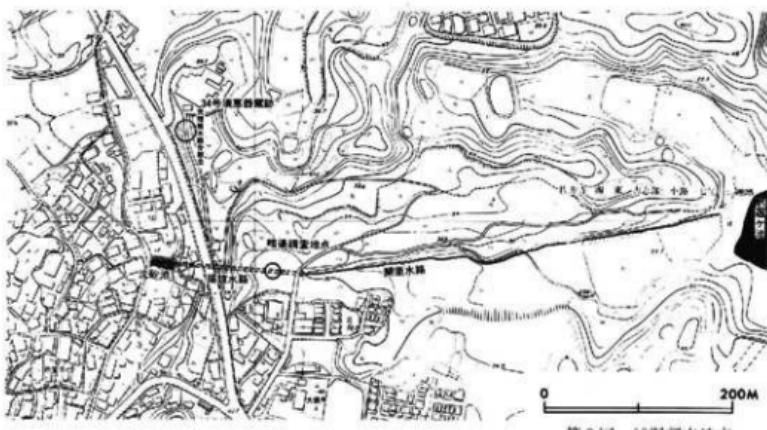
佐井寺地区土地区画整理事業においては、計画段階において、昭和49年度から、区画整理課と教育委員会の双方の協議がもたれ、昭和51年5月8日、教育委員会から区画整理課に対して、「佐井寺東地区土地区画整理に伴なう埋蔵文化財保存に関する資料(1)」が提出された。この中で、対象区域内に3カ所の周知の遺跡があることが明らかにされ、このうち遺構の存在が明らかな2カ所について、早急に試掘調査を実施して、遺構の埋蔵状況を把握する必要があると判断された。これに先だつ、昭和50年9月13日、大阪府文化財愛護推進委員会吹田市協議会から、対象区域内に所在する洪積層素掘り水路である「佐井寺掘抜水路」の保存をもとめた要望書が提出され、地元研究者からも、遺跡保存について、強い関心がよせられるに至った。

これらの経過の中で、区画整理課は、佐井寺掘抜水路の出口部分1600平方メートルについては、公園用地として確保し、これにより、造成による遺構破壊はまぬがれるべく配慮がとられた。しかし、昭和51年11月22日に行われた現地協議でも、水路の具体的な保存策についてはまとまりがつかず、加うるに掘抜水路本来の出口位置について、多くの異論がだされ、できるだけはやく水路旧状の把握が必要となつた。

このような経過をふまえて、須恵器窯跡34号と佐井寺掘抜水路の試掘調査が、昭和53年度に、区画整理課によって予算化され、今回の試掘調査に至つたのである。



第2図 須恵器窯跡の分布と34号窯跡(矢印) 破線は吉志部用水



第3図 試掘調査地点

第2章 試掘調査の経過

試掘調査は、昭和53年12月13日から、まず、須恵器窯跡34号に対して行なわれた。現地の竹藪伐採からはじめられ、測量調査に並行して試掘坑が設定された。

この窯跡は、昭和40年4月都市計画道路岸部一東佐井寺線の工事によって、灰原が破壊されて多数の遺物が散逸したほか、さらに昭和43年春の豪雨によって地滑りがおこり、その際にも灰原が露出して遺物の採集が行われたので、窯体の位置については、遺跡発見の当初から、予測されていた。今回の調査は灰原の埋蔵状況を把握することと、窯体の有無を確認することのふたつが目的であり、竹藪の斜面に3本の試掘堀を設定した。

第1試掘堀は、都市計画路線岸部一東佐井寺線のすぐ東側に設定したもので、かって露出した灰原の検出を試みたが、灰層の位置は意外に深く、地表下1.4メートルで、ようやく須恵器を含むする灰層に達した。

12月15日以降、斜面上方の調査を並行してすすめたところ、後世削りとられた崖面があり、その崖面を精査して、窯体の外周である赤色焼土が検出され、ここに精査部分を拡大することによって、窯体の断面を検出することができた。

これによって、崖面下の緩斜面に、第2試掘堀を設定し、窯体末端の焚口部分あるいは前庭部の検出を試みた。さらに最上部平坦面に第3試掘堀を設定したが、後世擾乱層があり窯体を検出するに至らなかった。第2試掘堀および、崖面の精査により、窯体の存在が確認されていたため、本トレーニチでは地山の落ちこみを確認した段階で、12月21日、試掘調査を終了した。

佐井寺掘抜水路の調査は、昭和54年1月12日から1月22日まで行われた。現在の暗渠部分の雑草伐採ののち、写真撮影・100分の1による地形測量を行った。ついで暗渠出口を清掃し、投光器により暗渠内を調査した結果、出口から20メートル以上の、コンクリート製ヒューム管が布設してあることがわかった。しかしこれは後世の施設であるので、在地の奥保溝、奥与右衛門氏の立会をもとめ、創設時の暗渠出口はもっと西よりであることがわかった。暗渠への潜入調査を計画したが、相当の危険がともなうおそれがあったので、潜入調査を断念し、丘陵斜面との間に試掘場を設定することにし、現在の暗渠出口と丘陵斜面の間を巾20メートルにわたって踏査し、暗渠の延長線上と考えられる部分で2カ所の地質軟弱な陥没部分を発見した。このうち、東側の陥没部が位置的にも中西家文書に記載された暗渠出口に近いことが予想されたので、この部分に試掘場を設定することとなった。

しかし、試掘場は掘り下げるにしたがって、含水量の多い周辺地盤からの浸出水のため試掘場の土壁が激しく崩壊して、通常の方法による発掘の難航は不可能となつたが、坪掘りによつて確認された地表下2.2メートルの部分の竹組みを検出するため、巾0.9メートル、長さ、1.1メートルの板製井枠を潜函式に挿入し、水路の修復の痕跡と想定される、太い丸竹と竹枝による造構を検出して記録をとり、1月22日調査を終了した。



第4図 水路調査風景

第3章 34号須恵器窯跡の試掘調査

1. 窯の立地

窯跡は、吹田市大字佐井寺3576番地の西面する丘陵斜面に位置している。現在は、天理教本摂分教会が丘陵上にあり、また都市計画道路岸部一東佐井寺線が丘陵端を通っているため、周辺地形は変形しているところもあるが、窯体の立地するところは、竹藪となってほぼ旧状を残存しているようにみられる。この丘陵は、佐井寺集落の東方より北・西・東南へと支丘を配する複雑な地形を呈するが、このうちの北へのびる小支丘の西斜面に窯が構築されている。この丘陵は、最高点で標高46mあり、谷部との比高が約18mである。

丘陵上は、ごく最近まで畠地として開墾されていたこともあって、平坦で歛の痕跡とみられる浅い凹凸が観察されるほどである。斜面上方には、竹藪独特の切り取り面があり、軽いテラス状地形を呈した箇所がある。(今回の調査で窯体を確認したのはこの断面である。)ここから傾斜がさらに急になり、約30°の角度をなしているが、都市計画線が通過した際に丘陵の裾を切



第5図 トレンチ位置図

り取って造成されており、昭和43年3月に崖崩れなどによって傾斜がさらにきつくなっているようである。

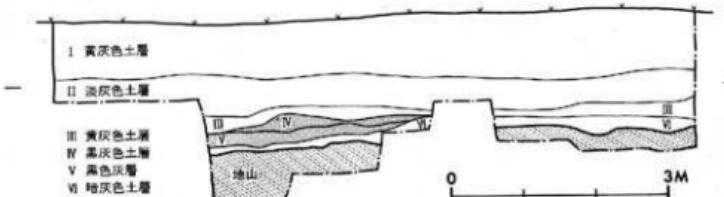
2. トレンチ調査の所見

第1トレンチ 都市計画路線のすぐ東側の丘陵斜面下方に、長さ9m・巾1.5mの斜面に平行するトレンチを設定した。掘削を進めると、表土直下に層厚0.4~0.5mの硬質の黄灰色土層(Ⅰ)があり、さらにやや軟質の0.2~0.3mの淡灰色土層(Ⅱ)、さらに0.05~0.15mの黄灰色土層(Ⅲ)の堆積がみられた。いずれも少量の須恵器細片をのこすが、近・現代の遺物も共伴し、比較的近時の土砂の堆積が意外に大きいことがわかった。以下、灰原を形成する灰層となるが一様なものではなく、淡い黒灰色層(Ⅳ)、黒色灰層(Ⅴ)、暗灰色層(Ⅵ)の3層に区分される。

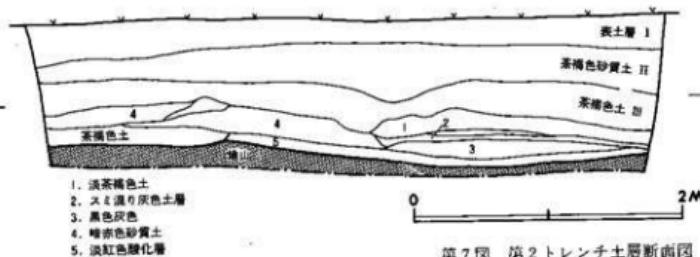
このうちⅣ・V層が最も濃い灰層となり、かつ、多くの須恵器・窓体壁片を含んでいる。以下

の淡灰色土層は、遺物を全く含めず、灰原形成以前の層位である。土層をみると、灰層自体は全体的に南から北方向へ流れる傾向にあり、トレンチの北端ではより濃密な灰層が検出されることが予想されたが、トレンチが深くなって危険であること、さらに、排土の置場に制限があることなどにより本トレンチの調査を終了した。

第2トレンチ 崖面の観察により確認された窓体下部の遺存状態を調査するため、崖面下のテラス状の緩斜面に長さ4.8m、巾1.5mのトレンチを設定した。表土層下に、後世の堆積である



第6図 第1トレンチ土層断面図



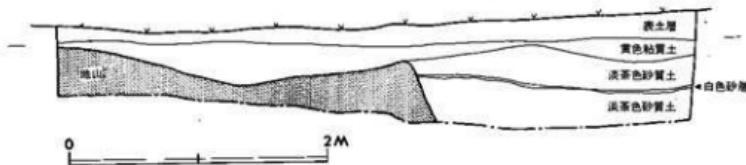
第7図 第2トレンチ土層断面図

茶褐色砂質土(II)があり、以下の層に窯体片・焼土など窯体関連遺物を包含する。

Ⅲ層は、窯体片を含む茶褐色土で、以下はやや複雑な層序を呈する。まず、トレンチ北から中央へ向って赤色焼土をまじえる砂質上層が、窯体塊をふくむ黄褐色土をブロック状にまじえながら堆積し、トレンチの南側へは黄褐色土、淡茶褐色土を上体とした土層が流れ込み、その下層は、黒色灰層やスミ混り灰色土層が存在する。

地山と判断される茶褐色土に密着して、巾3m以上にわたって淡紅色酸化層がみとめられ、窯底に似た状況を呈することも明らかとなった。ただ、この酸化層は、トレンチの西側へは遠せず途中で途切れてしまい、この部位を境として前後に大きく層序が変化することを示し、この場所が窯体の最末端付近であろうことが推定されるに至った。

第3トレンチ 明らかにされた窯体の真上にあたる丘陵最上部の平坦面を、長さ5.0m、巾2.5mにわたって発掘した。土層図でも明らかなように、地山と考えられる赤褐色粘土層がトレンチの中央で急に落ち込み、若干の須恵器を含む茶褐色砂質土が、これに堆積していた。この落ち込みのラインが、下方で検出された窯体の延長線上と考えられる個所であり、また、窯体の末端が第2トレンチではほぼ把握されていることにより、窯体の全長を約10mと想定すると、この落ち込み内に窯体遺存部が残存していることが明らかであるので、本トレンチ調査を終止した。



第8図 第3トレンチ土層断面図



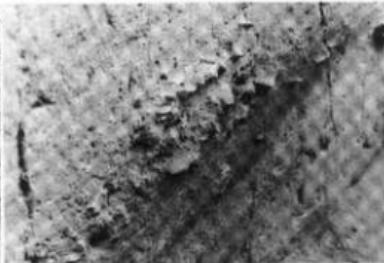
第9図 第2トレンチの設置位置



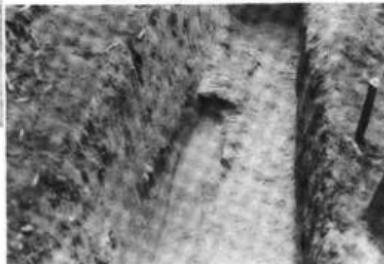
第10図 第3トレンチの設置位置



第11図 調査中の第1トレンチ



第12図 第1トレンチ検出の灰層



第13図 調査中の第2トレンチ

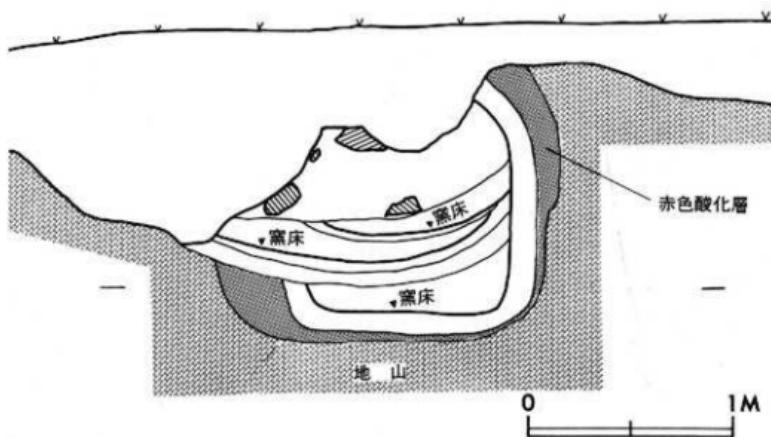
3. 窯体断面の観察

崖面の表面観察において、赤色焼土がみとめられたため窯体は容易に検出することができた。ただ、表面観察により、窯体断面図を作成したので、必ずしも主軸線に基づいた観察とはいえないが、窯体の概要は充分に把握される。

窯体壁は、後世の擾乱のため、北側壁が大きく破損しているが、南側壁は比較的良好な保存をしめし、天井ドームへの屈曲部までみとめられた。

窯体は明らかに2つの時期に分けられ、そのうちの古い段階のものは、巾1mをはかるやや狭い窯体であるらしい。粘土で塗り込まれた青灰色窯壁と外構をとりまく赤色焼土もよく残されている。新しい段階のものは、古段階の南壁を利用し、北壁を破壊して、赤褐色の埋土を置き窯体巾を拡張し、やや大きな規模の窯体を構築したように判断される。また、この段階の窯でも、明らかに2つの段階の窯床がみとめられ、新段階でも新たな窯の修復を行っていることが明らかである。

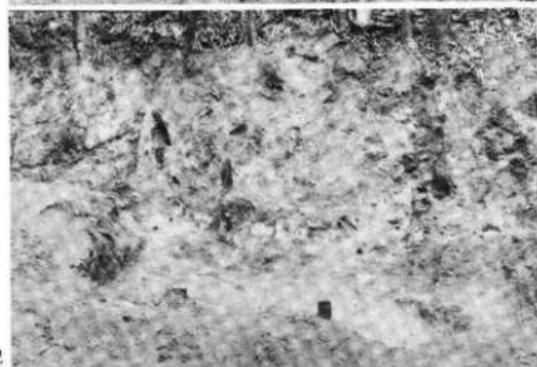
以上の所見からすると、本窯の窯体は、3つの段階があり、比較的長い期間の窯であることが予想される。ただ、窯体の重複にともなった顕著な遺物を確認していないので、詳細は本格的な調査に待たざるを得ない。



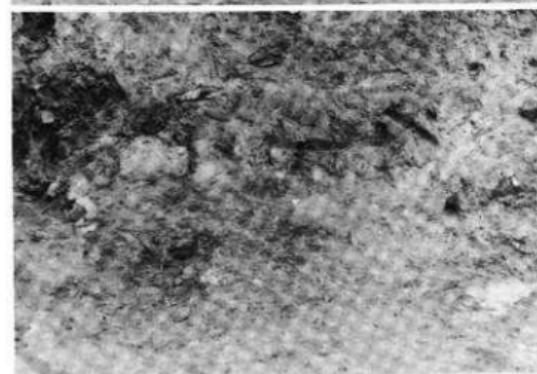
第14図 窯体断面図



第15図 窒体断面検出状況



第16図 窒体断面検出状況



第17図 窒床の酸化層

4. 出土遺物

第1・2・3の各トレンチにおいて出土した須恵器は、灰層内と擾乱土層内に区分されるが、第1・2トレンチ検出の灰層も、2次的に流れた灰層である可能性が強く、窯操業の詳細を示すものではないので、本節においては層位を厳格に分別せず、一括して取り扱うこととする。

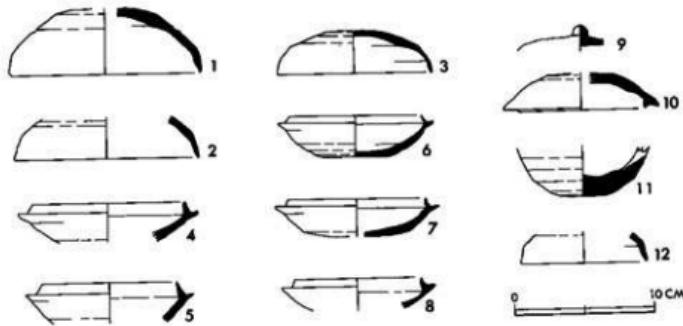
杯蓋（1・2・3） 口縁部径13.3～11.0cmをはかる小型化した杯蓋で、口端では内傾ぎみに屈曲しているものが多い。1はやや大型の器厚も大きな杯蓋。天井部のヘラケズリも粗い。

杯（4・5・6・7・8） 器径12.0～10.8cmをはかる小型化した杯。5は立ちあがりが内傾しつつも0.7cmの高さを有する。他はいずれも大きく内傾し、低くなる傾向を示している。他に立ちあがりがさらに低く、かえりの有する杯蓋か杯身が不明なものも若干みとめられている。

つまみ付杯蓋（9・10） 9は所謂乳頭状つまみを付けた杯蓋で、細片のため口端部の実体は不明で、天井部に自然釉の焼着があり、調整の細部も不明である。10はかえりを有する径11.2cmの杯蓋である。つまみ部分は欠失して不明。天井部に自然釉の焼着がある。

翫（11） 底部のみの破片であるが、側部から円孔の穿たれでいることから、翫と判断される。器厚の大きな翫である。

蓋形土器（12） 器径は9.0cmと小さく、口端がやや外方へ流れることから蓋形土器であろう。天井部ヘラケズリ調整か。



第18図 出土須恵器実測図

5. 小 結

このように、出土須恵器は灰原出土のものとしては量的にも少なく、かつ細片が多く、このことからも第1トレンチ検出の灰層は、灰原の本体ではなくて、2次的な流れを受けたものと考えられる。おそらく、トレンチ北側及び下方に濃厚な灰層を造していると思われ、これは天理教会への導入路工事の際に確認した所見とも一致する。

出土須恵器には、形態差があり、吹田須恵器窯跡群において試考されている5段階の分類に比すれば、その第III・IV・V段階に相当する遺物が出土しており、経営期間もいくらか長期にかかるものであることがわざる。

実年代としては、6世紀の後半でも末に近い頃から7世紀の初頭までの期間と考えるのが妥当であろう。

千里丘陵においては須恵器生産が終末に近づいたころであり、そのころになると、丘陵の奥部、佐井寺地域へ生産が移ることも明らかにされている。本窯はおそらく佐井寺支群における生産のほぼ全期間にわたる操業を行っていたと考えられ、本市の操業実体の終末期を示す指標として、重視されるべき窯跡である。

第4章 佐井寺掘抜水路の調査

1. 吉志部用水路の現状

佐井寺地区の雨水を自然排水にまかせると、現在の千里ニュータウンの南辺をかすめて正雀川へ流れ、安威川へと流下する。吉志部諸村を豊かに潤すには、東方にある釣廻ヶ池に水を溜めなければならない。釣廻ヶ池は『幾經雜事記』にも記され、建長年間（13世紀中頃）には成立していたとされる『古今著聞集』に大蛇伝説が録されるなど、古い歴史をこす用水池である。佐井寺地区からこの釣廻ヶ池へ用水を導びく水路が吉志部用水であるが、このためには、佐井寺東方の丘陵を越さねばならず、この洪積丘陵をくりぬいたのが佐井寺掘り抜き水路である。この用水路は明和年間（18世紀後半）には開通していたといわれ、掘り抜き部分の手前に沈砂池を持ち、120余mの掘り抜き水路、さらに開渠水路約450mにもおよぶものである。

この掘りぬき入り口の沈砂池は、すでに改修が行なわれ、コンクリート人孔が設けられているが、昭和49年8月に行なわれた略調査では、入口部分は大きな切石の花崗岩を使用したものであること、沈砂池からは、江戸時代の磁器が出土することなどが明らかにされた。掘抜水路部分に関しては詳細はわからないが、内部はやや広くなっている、洪積層を素掘りし、木組みで補強したものらしい。現在の暗渠内は泥土の堆積があり、内部もある程度の変形を被っている可能性があるが、一端、佐井寺側からの流水はあるらしい。

暗渠出口は、石組とコンクリートによって、開渠部分もコンクリート地上梁によって補強が



第19図 水路試掘地点の景観



第20図 現在の暗渠出口

行なわれている。奥保満氏によれば、これは昭和31・2年以後のことらしい。戦前には、暗渠出口はもっと西側であったらしく、現出口は盛土されたのちに造られたものということである。開渠部は、途中石組とコンクリートによる補強部分、流路を失って自然流水にまかされた箇所もある。积迦ヶ池に近い下流では、板杭による補強があり、これも昭和51年春に、积迦ヶ池土地改良区によって改修されたようである。

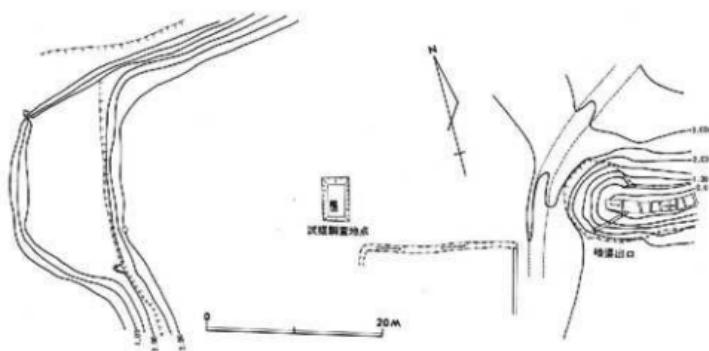
2. 試掘調査の成果

測量調査 暗渠出口付近、及びその西方から丘陵裾までを平板測量調査した。出口付近は、後世の盛土のため、旧地形は損なわれているが西方は、おむね旧状を残しているようである。この部分は平坦であるが、レベルを詳細に計ると、水路延長線上は最も低い。地下の水路を推測する一つの手がかりとなるかも知れない。た、この部分で陥没したような窪みをもつところが2箇所あり、これも水路と予想されるライン上にあるので下部構造の何らかの影響とみることができる。

暗渠出口 石組み及びコンクリートで施行されており、さらに、暗渠内の泥土を若干除いて



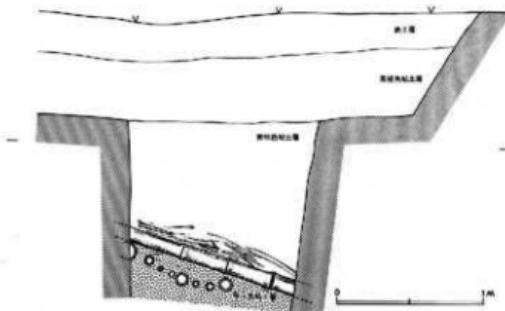
第21図 現在の暗渠出口



第22図 調査地点位置図

中をみると、内部は直径1mのヒューム管がくなくとも6本(延長20.1m以上と推定)は埋設されていた。このように、現在の出口付近は、旧状を残していないことが明らかとなった。

トレンチ調査 現出口西方30mの地点で3m×5mの試掘場をあけ、調査に入った。表土層以下の粘土層は、含水率が高く、土壁の崩壊が激しく、通常の方法ではトレンチの維持が困難となつた。このため、ボーリング棒によって感触の得られた地点のみを下げた結果、鮮緑色を呈する竹が検出された。この竹の性格を明らかにするため、この部分に横板を打ち込み、潜函式に調査をすすめた結果、直径4~10cmの竹を組み合わせてあり、その上を竹の小枝を重ねて屋根様に葺いてあることがわかった。竹組みの下は、さらに含水率の高い軟弱な暗灰色粘土となり、湧水がきわめて激しいため、調査の続行が困難となり以下の調査は打ち切らざるを得なかつた。調査にともなつて、第Ⅱ層から明治時代以降の磁器片が出土しており、また竹組みの材も、決して古いものとは考えられず、江戸期のものとはいがたい。戦前、この付近が陥没し、補修したことと同地の人々が伝えており、近時の補修の跡の可能性が最も高い。



第23図 トレンチ調査東壁土壌断面図

3. 小 結

今回のトレンチ調査において、掘り抜き水跡の内部を明らかにすることができなかった。したがって内部の保存状態は依然不明である。

成果の一つとして、現暗渠出口は後世のものであることが明らかにされたことがあげられる。地図上で暗渠の直線距離を測ると、長さ141mを測ることができる。中西家文書によると掘り抜きは127m余(70間余)と記されており、20m近い誤差が生じている。

暗渠内のヒューム管が約20mあることが調査で明らかにされており、この誤差とほぼ等しいことから、旧暗渠出口に、現在のヒューム管を接続したと理解することも可能といえよう。いずれにしても、旧状の究明は今後の調査に期待されよう。

第5章 今後の課題

今後の課題について問題点を以下に列挙する。

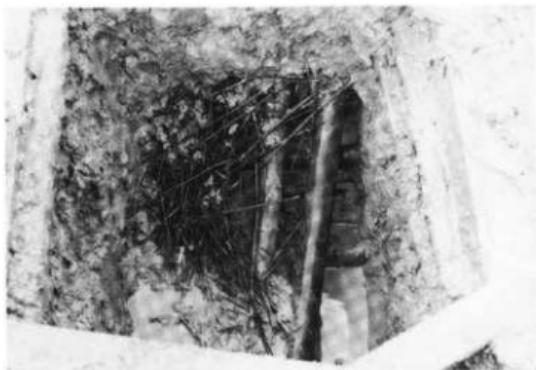
34号須恵器窯跡について

1. 一部破損しているものの、窯体が遺存していることが明らかとなった。
2. 灰原の遺存も明らかであるが、2次的な流失も多く、丘陵下方に落ち込んでいるらしいこと。
3. 灰原は予想以上に深いところにあり、全面調査の場合は多量の排土が必要となること。

佐井寺掘抜水路について

1. 内部の状況は依然不明であること。
2. 現在の暗渠出口は、後世のものであり、さらに西方に旧来の出口があつたらしいこと。
3. 暗渠内部の調査は、潜入調査にせよ、上部からの掘削調査にせよ、いずれにしても通常の方法では不可能で、機械力や特殊な工法・装備が必要であること。
4. 暗渠については、市内でも他に2個所みられたが、既に痕跡すらなく、その意味においては現存する唯一の例であること。府下近隣では、豊中市にも存在したことが古文書で確認されている。
5. 府下の考古例では貝塚市越兒隧道が調査された唯一の例であるが、隧道入口の石組みと、素掘り部分若干が調査されたにすぎない。佐井寺例の内部構造まで仔細に調査されれば稀な調査例となろう。

第24図 水路試掘調査で検出
された竹組み



第25図 睦渠入口側の水路内部
(昭和49年8月)



第26図 開渠の現状
(秋泡ヶ池付近)



佐井寺東地区土地区画整理事業にともなう

埋蔵文化財試掘調査概要報告書

昭和54年3月31日

編集 吹田市教育委員会
発行 吹田市都市開発部区画整理課